

【解説】これは恐ろしい報告である。デー・ウィギントンの記事は日ごとに絶望感を強めていく。彼は自分の警告が無視され続けることに苛立つが、さすがにこの記事に対する「いいね」ボタンの数は、掲載後数日で1800を超えている。本当に地球の生命維持能力があとわずかで失われるのだとしたら、どうすればよいのだろうか？ デイヴィッド・ウィルコックのいう divine interference——（間接的）神の介入——を待つよりほかないのだろうか？ 彼の哲学に従うなら、divine interference が起こるための条件は、人類の集団的意識革命よりほかない。こういったことを嘲笑する人がいたとしたら、その人には、ガイ・マクファーソンが引いている米女優の言葉——「あなた方がどれほど冷笑的になっても、いつまでもそれを続けることはできませんよ」——をぶつけるより他はない。

気象操作——どんどん時間がなくなっていく

Dane Wigington (geoengineeringwatch.org)

March 21, 2014



もし読者がここに述べることを、大げさな、警告家ぶった文章だと思われるなら、どうぞ最後まで読んでください。

私は長年にわたって、我々の現実の全体像を、つとめて感情を抑えて描こうとしてきた。この地上の事実がそれを私に要求した。ほとんどの（全部とはいわない）人々が、いかにそれをバックアップする事実のデータを見せられても、このおぞましいメッセージを完全に拒否してきた。私と私の仲間たちは、非常に長い年月にわたって、地球規模のメルトダウン、メタンガスの放出、それに「天井知らずのグリーンハウス効果」の可能性などについて警鐘を鳴らしてきた。このような警告は一般に過小評価され、無視されてきたが、こ

それを否定したところで、今連日のように明るみに出ている事実に、ストップをかけることはできない。現在のところ、アル・ゴアの偽善、主流メディアのプロパガンダ機構、それに気象操作をする者たちの結合の効果によって、世界の大多数の人々は、この惑星は冷却化しつつあると思いこまされている。このような結論は、ごく近い将来、その本当のあり方が露見して、真っ赤な嘘であったことがわかるだろう。

産業化された文明が容認し得るものであったことはなく、現在それは断末魔の苦しみに喘いでいる。崩壊はいつやってきてもよい状態にある——地球上の生命にこれ以上生き延びるチャンスが、わずかにあるとしても。すべての利用できる統計結果にそれが現れていることを、これを読み続ける人は念頭に置いておくべきである。

私は完全に正直なデータを掲載することを控えていた。それは、このような情報が全く拒否されるか、これを客観的に調べようとする意欲をもっていた人々を、黙らせてしまう結果になることを怖れたからである。私が期待していたことは、気象操作と生物世界の現状についてある程度まで警告を流せば、この情報を調べた人々が、気象操作をやめさせる戦いを、何よりも優先させざるを得ないだろうということだった。しかしあまりにも多くの場合、それは起こらなかった。

私たちは、ほとんど完全に否定と欺瞞の上に築かれた社会に生きている。我々の周囲で壁が崩れ落ち、世界中で資源争いが荒れ狂っていても、今起こっていることの深刻さ感じている人々はわずかのようだ。思いきった大変化を起こすために、我々に残されている時間はほんのわずかである。そうしなければ、ほとんど確実にすべてが失われる——もしすでに失われていなければ。



Guy McPherson による下の論文は長い。しかしこれはきわめて重要なものである。

ガイは、アリゾナ大学の天然資源と環境問題の名誉教授で、さまざまな賞を受けながら、20年間教え研究を続けてきた。ガイは信じられぬほどの勇気と明瞭さをもって、非の打ちどころのない研究と参考資料を発表してきた。科学者共同体のあまりにも大きな部分が、崩れゆく地球の生命維持システムの与える脅威について、犯罪的な沈黙を押し通している。その同じ科学者たちが、堂々とウソをつき、気象操作からくる段階的な死と、大衆を黙らせコントロールしようとする明らかな試みの全体を、最後の瞬間まで隠そうとしている。

下に転載するきわめて重要なテキストと参考資料を読むときに、心にとめておかなければならないことは、行われている気象操作への言及がないことである。それがなぜかについて、私はマクファーソンに代わって言うことはできないが、彼とのやり取りによって分ったことは、地球規模の気象操作という問題については、厳しいしっぺ返しを受けることなしには、直接これを論ずることはできないようだった。これも私の結論であって、ガイ・マクファーソン自身が述べたことではない。

我々は、どんなに見通しが暗くても、諦めることはできないし諦めてはいけない。誰も、事態がどのように展開するかを、自信をもって言える者はいない。もし気象操作を暴きこれをやめさせることから始めて、我々が人類のために、完全な方向転換を成し遂げることができたら、どんな未知の要因が現れて我々に有利に働くか、誰も予見することはできない。今こそ、自分が本来何であったのかを見出すときである。

気象変化——要約とアップデート

(以下は2014, 1月17日に最終アップデートしたものである——ガイ・マクファーソン)

この次第に膨れ上がるエッセーにおいて、私はしばしば都合のいい情報だけを拾っていると言って非難される。それは認めよう。しかし私はそのことを2014, 1月30日のこのエッセー(リンク)で説明した。

アメリカの女優リー・トムリンはこう言ったと伝えられる——「あなた方がどんなに冷笑的になっても、いつまでもそれを続けることはできませんよ」。気象科学に関しては、附いていこうとする私の努力は、新しいデータ、モデル、位置づけによって、毎週のように吹き飛ばされている。状況がどんなに恐ろしいものになっても、最新の報告をチェックする度に、それはもっとひどくなっている。

政治家、非政府組織の首脳、企業のリーダーといった人々の反応は、いつでも同じである。

彼らは気味の悪い「無の沼地」のぬかるみに足を取られている。「気象変化に関するフレームワーク国連会議」のシニア・ディレクターHallor Thorgeirsson は2013, 9月17日、こう言った——「我々は国際共同体としては失敗している。我々は目標を見失っている。」この人たちは、現在進行中の大災害へ向かっての突進を知っていて、(たとえ警告するだけでも) おそらく何かができる人々である。トムリンの短い言葉は、彼らが1ドルを稼ぐために地球上の生命を犠牲にしているのを考えるときほど、ぴったり感じられることはない。

上にあげた怪物たちよりもっと酷いのはメディアである。大企業や企業国家の完全な虜になって、メディアは、気象変化という問題をめぐって踊り続けている。ときたま率直な論評が発表されることもあるが、それは一般的に間違った方向に向かっている——気象科学者や活動家は死刑にせよといったような (e.g. James Delingpole の2013, 4月7日、テレグラフ紙に発表した憎しみに満ちた論文—リンク)。主導的な主流情報機関は日常的に大衆にウソをついている。2014, 1月11日の報告によれば (リンク)、「BBCは6年にわたって、彼らの地球温暖化の情報源であった、ある異常な“エコ”会議を秘密にしておくために、数万ポンドを使った。」この2006年の会議では、環境活動家や科学者がBBCの最高首脳28名に対して講義をしたが、その中の一人は、気象変化は地球規模の核戦争より危険が大きいと話した。

主流科学者たちは、あらゆる場面でメッセージを矮小化している。何年も前からわかっていることだが、科学者はほとんどの場合、気象上の衝撃的事実を軽く扱う。そしてある場合には、科学者たちは彼らの政府によって、攻撃的に口封じをされる。私は科学者の間に陰謀があると言っているのではない。科学は保守主義に傾くもので、学界は極端な保守主義をとる。こうした人々は、文明に対する脅威の存在を指摘することによって、自分が不当な注目の対象になることを嫌う。人類への近未来の脅威といったようなことは当然、口にしない (それを言うなら全生物種と言わねばならない)。この考えは、気象変化学者は日常的に、「劇的出来事の小さい側で間違う」ことによって衝撃を過小評価すると指摘した論文で保証された (*Global Environmental Change*, 2013, 2月号—リンク)。

いつも遅れて議論に加わる「気象変化に関する政府間パネル」(IPCC) は、気象操作をしなくても地球温暖化はすでに不可逆的だと認めた(2013, 9月27日報告—リンク)。 *Earth System Dynamics*, 2013, 12月5日号に指摘されているように、気象操作の既知の戦略が成功する可能性はない——「気象の人工操作によって地球温暖化を元へ戻すことは全く不可能だ (リンク)。」 「反射する微粒子を成層圏に注入することによって、地球温暖化の衝撃を逆転させようとする試みは、事態を悪化させるだけである」 (*Environmental Research Letters*, 2014, 1月8日論文—リンク)。加えて言えば、 *Journal of Geophysical Research: Atmosphere*, 2013, 12月号に書かれているように、気象操作は地球を冷却することに成功

するかもしれず、また世界中の降水パターンを変えるかもしれない。その上、「突然の危険な温暖化のリスクは、SRM（太陽熱放射管理）の大規模な実行には付き物である」（*Environmental Research Letters*, 2014, 1月12日号発表—リンク）。結局、「地球温暖化によって生じた災難を、意図的に地球の気象操作によって抑えようとする計画は、あまり役に立たないか、実は事態を悪化させる可能性が高い」（*Nature Communications*, 2014, 2月25日号論文—リンク）。実際、一般大衆もこれを有難いとは思っていない——「気象操作についての大衆の評価は一般的に否定的であった」（*Nature Climate Change*, 2014, 1月12日号論文—リンク）。

気候の漸次変化ということは保証されない——「地球の気候の歴史は、年輪や海中の堆積物やアイス・コアなどに記録されているものから判断すると、数十年から数年という短い期間に、大きな変化が急激に起こっていることを示している」（2013, 12月 *U.S. National Academy of Sciences* 報告—リンク）。

もし読者が下に提供されている証拠を読むひまがなければ、全体に共通するのはこういうことである——基本ラインから4°C高い惑星上で我々が用意できることは、人間の絶滅である（Oliver Tickellの2008ガーディアン紙論文—リンク）。ティックェルは、人間が基本ラインから3.5°C以上高い気温で生存したことがない（すなわち1750年に始まったとされる産業革命以来）ことを考えて、控えめなアプローチをしている。世界銀行の2012年報告「熱を抑えよ——なぜ4°C高い世界になってはいけないか？」（リンク）と「BPエネルギー統計展望2030」（リンク）から、Barry Saxifrageが割り出してバンクーバー・オブザーバー紙に載せた論文によれば、我々はまっしぐらに4°C境界に向かっている。ポーランドのワルシャワで2013, 11月に開催された「第19回気象変化フレームワーク国連会議」（COP19）は、気象学教授Mark Maslinによってこう警告された——「我々がすでに4°C世界にそなえて計画をしているのは、そこへまっしぐらに向かっているからです。そのように考えない科学者がいるとは私は思いません。」この惑星的大惨事をさらに論じているのは、*Proceedings of the National Academy of Sciences* 2013, 12月16日号に載った論文で、それは、4°Cという温度は、地球上の植物が大気中の二酸化炭素を取り込む能力に、終止符を打つものだと結論している（リンク）。

私は、4°C世界（つまり絶滅）にそなえて何を計画しているというのか、わからない。文明社会の科学者が、そのための計画をするということもわからない。

Nature Geoscience, 2013, 7月28日号オンライン論文（リンク）の著者Colin Goldblattによれば、「歯止めのないグリーンハウス効果は、これまで考えられていたより、はるかに簡単に始まる可能性がある。」のみならず、サイエンス誌2013, 8月1日号に指摘されたよ

うに（リンク）、近未来において地球の気象は、過去 6,500 万年のどの時期よりも、桁違いの速さで変化するだろう。これに、すでに我々が最近発生させた、大きな、増える一方の自動強化的フィードバック効果は別にして、5,500 万年前、13 年の短期間に起こった、地球平均温度の 5°C の上昇（リンク）を考え合わせてみるならば、我々賢いサル未来は困ったことになりそうだ。この結論は、トロント大学の研究者たちが 2013 年に発見した、長期間続く、信じられないほど強力な、大気圏のグリーンハウス・ガス（リンク）を勘定に入れていない。この P F T B A ガスは、大気圏内のグリーンハウス・ガスとして、二酸化炭素の 7,100 倍も強力であり、大気圏に何百年も滞留する。それはまた、気象変化の不可逆的性質も勘定に入れていない——地球の大気圏は最低でも、少なくとも次の千年間は、その時の二酸化炭素濃度レベルを保持するだろう（*Proceedings of the National Academy of Sciences*, 2009, 1 月 28 日号—リンク）。

・・・（続く十数ページは省略）